

専門演習2 「行動科学と計量社会学」

目的と日程

村瀬洋一
murase@rikkyo.ac.jp

1. 演習3年次の目的

- 1) 批判的精神を持ち、真実とは何か自分で判断できる能力を身につける
- 2) 討論、発表、文章の組み立て、調査実施、データ分析能力の修得
- 3) 論理的に考え、調査と分析により自分独自の成果を発表する能力の修得

2. 主な内容

- 1) テキストや学術論文をもとに発表と討論。知識の暗記でなく、学問の考え方を理解し、自分で理論や仮説を作ることを重視。また、研究の最新状況を把握する。
- 2) 情報収集法や発表法などの「仕事の進め方」、「知的生産の基礎技術」の全般的訓練
- 3) 各自が自分の興味関心にしたがってテーマを設定し、小研究（ゼミ論）を実施
既存の調査データを分析して発表と討論
- 4) データ分析結果の発表（重回帰分析、因子分析などの多変量解析の実習）

3. 日程予定（前期14回、後期14回）

日程	回	内容
4月11日	1	演習の概要と予定 ★課題 自分のテーマについてと、1章感想を 立教時間ワークシートに書き込む（締切4/17） 次週準備、テキスト買う、忘れずに
4月18日	2	学術論文の発表：学会誌掲載の論文を要約すること
4月25日	3	学術論文の発表
		***** 休講 *****
5月9日	4	テキスト3章 オンライン・データベースについて
5月16日	5	テキスト5章 文献検索法について
		この回以降、テキストの発表後に、自分の仮説や先行研究について発表
5月23日	6	テキスト6章 各自のホームページ作成
5月30日	7	テキスト7章
6月6日	8	分析実習SPSSの基礎
6月13日	9	分析結果発表 平均値とクロス集計
6月20日	10	分析結果発表 平均値とクロス集計
6月27日	11	分析実習 重回帰分析
		★ゼミ合宿 ゼミ論と卒論の構想発表会
7月4日	12	分析実習 重回帰分析
7月11日	13	分析結果発表 重回帰分析
7月18日	14	分析結果発表 重回帰分析
		***** 夏期休業 *****
9月20日	15	分析実習 分散分析
9月27日	16	分析実習 分散分析
10月4日	17	職業を用いた分析 発表
10月11日		***** 休講日 *****
10月18日	18	分析実習 因子分析
10月25日	19	テキスト その2
		***** 秋期休業 *****
11月8日	20	分析実習 因子分析
11月15日	21	因子分析の結果 発表
11月22日	22	テキスト その2

11月29日	23	テキスト	その2
12月6日	24	分析結果発表	
12月13日	25	テキスト	その2
12月20日	26	テキスト	その2
★ゲストスピーカー企画			
	*****	冬期休業	*****
1月10日	27	ゼミ論発表	仮説と分析結果
1月17日	28	ゼミ論発表	仮説と分析結果
	*****	試験期間	*****
2月18日		最終発表会	

注 発表者は資料を作成し人数分コピーすること。資料は必ずA4版で印刷。
発表の際は、必ず、資料の最後に各自の批判意見を書くこと。単なる感想でなく内容への批判を書く。自分独自の考えを書いているものは高得点となる。

村瀬の海外研究のため、春学期は三輪東大教授（元村瀬ゼミ）が担当。

テキストは必ず購入する。 学術書は一般の本屋にはないので立教の書店で早めに注文。
★ゼミ合宿は6月後半予定。1泊2日、全学年合同でゼミ論、卒論構想発表会

4. 面会時間、ホームページとeメール

恒常的にeメールでの連絡をするので、立教メールをよく見ること。なお以下の村瀬ゼミページに最新情報を掲載する。

<http://www2.rikkyo.ac.jp/web/murase>

演習内容に関して質問等があれば、演習中の質問も大歓迎だが、下記までeメールを出しても良い。ただし、成績に関する質問や陳情は不可。

面会時間（Office hours：木曜12:30-1:20）は研究室を開放しているので、質問などあれば予約なしで自由に来てください。他には研究室ドアに、村瀬の都合の良い時間がはってあります。研究・教育活動のため多忙なので、来訪の際はメールをしてからの方が良い。

5. 注意点

やる気のある人ならば誰でも歓迎です。最後までゼミをやり通し、卒論を書いてください。バイトやサークル等をゼミよりも優先することはないように。他学部を含め、他のさまざまな講義も積極的に受講して視野を広げ、数学や統計学の基礎訓練や情報処理、英語なども身につけてるとよい。

毎日、新聞やテレビニュースを見て、様々な雑誌に目を通すなど、自分の世界を広げる努力をする。大学外の、現実の社会と接する努力をすることを、とくにおすすめる。

『社会学評論』や『理論と方法』、『社会学研究』、『社会心理学研究』、『ソシオロジ』などの学術雑誌の他、英文論文も積極的に読むこと。*American Sociological Review*, *American Journal of Sociology*, *American Political Science Review*などの過去数年分の目次を見て、論文本文をコピーするとよい。

調査実習の訓練は「社会調査演習」等の時間に行う。履修要項の社会調査士に関する記述を読み関連科目を取る。遅刻や無断欠席は厳禁。欠席は、必ず事前にメールで連絡する。

6. テキストと参考書の解説

テキストは各自で必ず購入する。参考文献も、自分が興味を持てるものはできる限り購入し、自宅で読みたいときにすぐ読める状態にしておく。

学生時代は贅沢はつつしむ一方、本代と食事代は惜しまないことをお勧めする。本代は知識を、食事代はあらゆる仕事の基礎となる体力を養うために必要。

6.1. テキスト

- 林拓也他編. 2022. 『格差と分断/排除の諸相を読む』晃洋書房.
村瀬洋一他編. 2007. 『SPSSによる多変量解析』オーム社.
数土直紀. 2015. 『社会意識からみた日本 一階層意識の新次元』有斐閣.

6.2. 参考書

- 赤川学. 2004. 『子供が減って何が悪い！』筑摩書房.
ボンシュテット・ノーキ著＝海野道郎・中村隆監訳. 1990. 『社会統計学 一社会調査のためのデータ分析入門』ハーベスト社.
文春新書編集部編. 2006. 『論争 格差社会』文藝春秋.
中央公論編集部編. 2001. 『論争・中流崩壊』中央公論新社.
ロバート＝C＝クリストファー. 1983. 『ジャパニーズ・マインド』講談社.
★外国人による日本社会論の中ではとてもよくできている。
土場学編. 2004. 『社会を“モデル”でみる 一数理社会学への招待』勁草書房.
原純輔. 1981. 「階層構造論」. 安田三郎・塩原勉・富永健一・吉田民人編. 『基礎社会学4：社会構造』東洋経済新報社.
原純輔編. 2002. 『流動化と社会格差』ミネルヴァ書房.
原純輔・盛山和夫. 1999. 『社会階層 豊かさの中の不平等』東京大学出版会.
原純輔他編. 2000. 『日本の階層システム』1～6巻. 東京大学出版会.
★1995年SSM調査の分析結果をもとにした論文集。
原純輔・海野道郎. 2004. 『社会調査演習 第2版』東京大学出版会.
★社会調査法について、巻末の調査票見本などよくまとまっている。
橋本健二. 2018. 『新・日本の階級社会（講談社現代新書）』講談社.
橋本健二. 2018. 『アンダークラス（ちくま新書）』筑摩書房.
橋本健二. 2020. 『中流崩壊』朝日新聞出版.
林信吾. 2005. 『しのびよるネオ階級社会 一“イギリス化”する日本の格差』平凡社.
樋口美雄・財務省財務総合政策研究所. 2003. 『日本の所得格差と社会階層』日本評論社.
平野浩. 2007. 『変容する日本の社会と投票行動』木鐸社.
本田由紀. 2009. 『教育の職業的意義一若者、学校、社会をつなぐ』筑摩書房.
今田高俊. 1989. 『社会階層と政治』東京大学出版会.
稲葉陽二. 2011. 『ソーシャル・キャピタル入門 一孤立から絆へ』中公新書.
石田浩編. 2017. 『教育とキャリア [格差の連鎖と若者]』勁草書房.
蒲島郁夫. 1988. 『政治参加』東京大学出版会.
鹿又伸夫. 2001. 『機会と結果の不平等』ミネルヴァ書房.
苅谷剛彦. 2001. 『階層化日本と教育危機 一不平等再生産から意欲格差社会(インセンティブ・ディバイド)へ』有信堂高文社.
吉川徹. 2018. 『日本の分断 一切り離される非大卒若者(レッグス)たち』光文社.
小林淳一・木村邦博編著. 1991. 『考える社会学』ミネルヴァ書房.
★初学者が実証的な社会学を学ぶために、よくできた本。
小林淳一・木村邦博編著. 1997. 『数理の発想で見る社会』ナカニシヤ出版.
高坂健次・厚東洋輔編. 1998. 『講座社会学1 理論と方法』東京大学出版会.
三船毅. 2008. 『現代日本における政治参加意識の構造と変動』慶應義塾大学出版会.
三浦展. 2005. 『下流社会 一新たな階層集団の出現』光文社新書.
★あとがきにあるようにデータは偏っている。分析も多くは不適切だが、おもしろい部分もある。
宮野勝. 1986. 「誤答効果と非回答バイアス：投票率を例として」. 『理論と方法』Vol.1 No.1:101-114、ハーベスト社.
村上泰亮. 1984. 『新中間大衆の時代』中央公論社.
麦山亮太. 2017. 「職業経歴と結婚への移行 一雇用形態・職種・企業規模と地位変化の効果における男女差」. 『家族社会学研究』第29巻第2号：129-141.
村瀬洋一. 2006. 「階級階層をめぐる社会学」宇都宮京子編『よくわかる社会学』ミネルヴァ書房.
永吉希久子. 2020. 『移民と日本社会 一データで読み解く実態と将来像』中央公論新社.
中野雅至. 2006. 『格差社会の結末 富裕層の傲慢・貧困層の怠慢』ソフトバンク新書.
中村高康・三輪哲・石田浩編. 2021. 『少子高齢社会の階層構造1 一人生初期の階層構造(シリーズ少子高齢社会の階層構造 1)』東京大学出版会.
中澤渉. 2013. 「通塾が進路選択に及ぼす因果効果の異質性 一傾向スコア・マッチングの応用」. 『教育社会学研究』第92集：151-174.
直井優他編. 1990. 『現代日本の階層構造』第1～4巻. 東京大学出版会.
大竹文雄. 2005. 『日本の不平等』日本経済新聞社.
★橋木に反論し日本は平等だとしている。

- 大竹文雄. 2010. 『日本の幸福度—格差・労働・家族』日本評論社.
- レイブ・マーチ著＝佐藤嘉倫・大澤定順・都築一治訳. 1991. 『社会科学のためのモデル入門』ハーベスト社.
- 佐藤香編. 2017. 『ライフデザインと希望（格差の連鎖と若者）』勁草書房.
- 佐藤俊樹. 2000. 『不平等社会日本 一さよなら総中流』中央公論新社.
- 佐藤嘉倫他編. 2011. 『現代の階層社会』1～3巻. 東京大学出版会.
★2005年SSM調査の分析結果をもとにした論文集.
- 佐藤嘉倫・木村敏明. 2013. 『不平等生成メカニズムの解明 一格差・階層・公正』ミネルヴァ書房
- 盛山和夫他. 2005. 『「社会」への知 現代社会学の理論と方法 上下巻』勁草書房.
- 盛山和夫. 2011. 『経済成長は不可能なのか—少子化と財政難を克服する条件』中央公論新社.
- 盛山和夫他編. 2011. 『日本の社会階層とそのメカニズム 一不平等を問い直す』白桃書房.
★階層に関する最新の分析結果をまとめた論文集.
- 盛山和夫他. 2015. 『社会を数理で読み解く 一不平等とジレンマの構造』有斐閣.
- 数土直紀. 2010. 『日本人の階層意識』講談社.
- 数土直紀. 2013. 『信頼にいたらない世界 一権威主義から公正へ』勁草書房.
- 数土直紀・今田高俊. 2005. 『数理社会学入門』勁草書房.
- 曾良中清司. 1983. 『権威主義的人間 一現代人の心にひそむファシズム』有斐閣.
★権威主義研究について分かりやすくまとめた良書.
- 橘木俊詔. 1998. 『日本の経済格差』岩波書店.
★所得や資産の格差を分かりやすく解説した新書。近年の日本社会は先進諸国の中でも格差が大きく、経済的に平等な社会とは言えないと主張している。
- 橘木俊詔. 2006. 『格差社会 何が問題なのか』岩波書店.
- 田辺俊介. 2011. 『外国人へのまなざしと政治意識 一社会調査で読み解く日本のナショナリズム』勁草書房.
- 田辺俊介. 2019. 『日本人は右傾化したのか 一データ分析で実像を読み解く』勁草書房.
- 谷口尚子. 2005. 『現代日本の投票行動』慶應義塾大学出版会.
- 谷岡一郎. 2000. 『「社会調査」のウソ 一リサーチ・リテラシーのすすめ』文芸春秋.
★世間一般の調査の問題点について分かりやすく解説した新書.
- 谷岡一郎, 仁田道夫, 岩井紀子編. 2008. 『日本人の意識と行動：日本版総合的社会調査 JGSSによる分析』東京大学出版会.
- 富永健一. 1979. 『日本の階層構造』東京大学出版会.
- 友野典男. 2006. 『行動経済学 一経済は「感情」で動いている』光文社新書.
- 筒井淳也. 2015. 『仕事と家族 一日本はなぜ働きづらく、産みにくいのか』中央公論新社
- 筒井淳也他編. 2016. 『計量社会学入門 一社会をデータでよむ』世界思想社.
- 和田英樹. 2006. 『「新中流」の誕生 一ポスト階層分化社会を探る』中公新書.
- 山田昌弘. 2021. 『新型格差社会』朝日新聞出版社.
- 山口二郎. 2004. 『戦後政治の崩壊 一デモクラシーはどこへゆくか』岩波書店.
- 山口一男. 2017. 『働き方の男女不平等 一理論と実証分析』日本経済新聞出版社.
- 安田三郎. 1971. 『社会移動の研究』東京大学出版会.
★日本社会の開放性に関する代表的研究.
- 安田三郎・海野道郎. 1977. 『改訂2版 社会統計学』丸善.
- 安田三郎・原純輔. 1982. 『社会調査ハンドブック（第3版）』有斐閣. 2200円.
- 寄本勝美. 2003. 『リサイクル社会への道』岩波新書.
- 与謝野有紀編. 2006. 『社会の見方、測り方 一計量社会学への招待』勁草書房.
- 和田秀樹. 2006. 『新中流の誕生』中央公論新社.
- 2005年SSM調査研究会. 2008. 『2005年SSM調査シリーズ』第1～15巻. 2005年SSM調査研究会.

7. 社会調査士資格について

調査と分析の能力のある人に対して資格を与える制度。単位を取るだけで資格取得できる。現実社会を調査し分析する能力が身につく、自分の訓練のためにはとても良い。履修要項を見て、関連科目を積極的に履修する。

8. 卒業論文の作成

自分の興味関心にしたがってテーマを設定し卒業論文を作成する。論文作成によって、問題設定、調査、分析、考察の能力を身につける。3年次で得た能力をさらに発展させるとともに、1年間を通じた仕事の進め方を身につけること。

4月～5月 文献リスト作成、レビュー論文を読む（就職活動と平行して進めること。時間の使い方を工夫するのも大切な訓練。）

- 6月～7月 テーマと仮説を明確にし、卒業論文の大まかな目次を作る。8月中に、卒業論文構想発表会を行う。テーマをしぼって先行研究をさらに読む。
- 8月～9月 調査実施、分析開始。調査をする場合、10月中には終わるように。
- 10月～12月 卒業論文本文執筆。★11月10日頃に卒論仮提出。12月18日頃に提出。

9. 成績評価

成績は、発表の成果と討論の参加具合、課題によって決定する。討論に積極的に参加し、演習の発展に貢献した者、良い質問をした者は記録し高得点を付ける。発表内容が良かった者も、もちろん高評価となる。課題では自分独自の意見を書くことが大切。

10. 引用法と盗作について

引用と盗作は違うものである。引用は自由だが、必ず引用元を書かなくてはならない。レポートや論文作成の際に、引用元を書かずに引用すれば、盗作したことになるので、十分に注意すること。最近、ネット上の文章をそのままコピーしてレポートで使う例も増えているが、これは泥棒と同じで、完全なルール違反である。

他人の文章を、自分の文章であるかのように書くと盗作になるが、悪気はなくとも、引用元を明示せずに盗作になっているものが時々見られる。レポートや卒論等で、他人の文書を引用するときは、必ず引用部分を「 」でくくり、引用の前に、引用元を書くこと。それ以外の形式で引用してはいけない。また、必ず「引用元」を明示すること。引用元を書かずに引用すると、盗作したことになるので、著作権法に反し、学問上、重大なルール違反となる。引用は自由だが、盗作してはいけない。なお他人の文章を引用するときは、山田(2006: p.27)によれば、「○○」である、などのように、必ず引用元を先に書くこと。

★文献リストの形式 — 著者名と発行年を必ず最初に書く。発行年は半角数字で。その後、「論文名」『本や雑誌名』と発行所を書くこと。論文名は一重かっこ、本や雑誌名は二重かっこを使う。上記の参考文献や、テキスト巻末の文献リスト形式を参照。

発表や資料作成については、第三者が読んだ時に内容が伝わるために、何を工夫すれば良いか、よく考えることが重要。立教大学の大学教育開発・支援センター作成の

- ・Master of Writing (レポートの作成)
 - ・Master of Presentation (プレゼンテーションの準備)
- の内容を理解する(web上に資料あり)。

11. ネット上の情報について

基本的に、ネット上の情報や、ネット上の事典、ウィキペディア、各種ブログやネット上データは、「ガセネタ」も多く信憑性が低い。個人が趣味で作った文章で、正確なチェックはなく、いかげんで信用できない情報が多い。また、すぐに消えてしまう情報も多いので、研究において使うべきではない。必要な情報は、本として出版されているものから引用すること。本として出版されたものは、編集者のチェックもあり信用度は高い。

また、インターネット上のグラフや画像や写真などを使用すると盗作になるので、やってはいけない。例え引用元を示していても、デザインの無断使用となるので著作権法違反であり、盗作である。泥棒をしてはいけない。他人が作った写真やグラフは、絶対に使わないこと。グラフなどは、元の数字を使って、自分で作り直すこと。

多くの場合、最新のデータは本や統計資料となっている。データを調べるときは、必ず

図書館へ行くこと。データ検索をネットのみですませることは、絶対にしてはいけない。図書館の参考室には、各種の事典や図鑑、数十冊からなる百科事典もある。まず図書館で、きちんとした百科事典の索引を見て、使ってみると良い。百科事典を馬鹿にしてはいけない。なお、信用できる統計データも、ネット上に少しはあるが少ない。これについては、村瀬ゼミホームページの「文献や統計リンク集」などを見る。また、調査データについては、立教大学のデータアーカイブや、SSJデータアーカイブなどを見ること。

12. 文献検索について

立教内LANに接続されているパソコンであれば、無料で使えるオンラインデータベースが各種ある（あるいはVPN接続をして立教のイントラネットへのアクセスをする）。**図書館ホームページ**の解説をよく読むことが重要。学術雑誌内の目次情報や、新聞記事検索（学内のみ）が可能。まずは、以下を使いこなすとよい。

- ・ 国立国会図書館ホームページ 「雑誌記事索引」
 国会図書館サーチ → 「記事・論文」ボタン
- ・ サイニィ (CiNii Articles 論文情報ナビゲータ 学術雑誌目次等)
- ・ Google Scholar

学会が出している学術雑誌を読むことは重要。新しいものはデータベースに入っていないしネット上にないので、必ず紙の目次を見ること。目次情報のみの検索が多いので、本文は図書館で入手する。日本社会学会が年4回出す雑誌は『社会学評論』である。その他、『社会心理学研究』や数理社会学会『理論と方法』などを手に取ってみるとよい。

その他、村瀬ゼミホームページの目次下にある「文献や統計リンク」をよく見ること。

13. 村瀬の研究例 — 平等に関する意識の規定メカニズム

1) 目的

不平等に関する意識 — 規定要因を解明
都市—農村による違い、年齢による違い

仮説の例 — 原因と結果の2変数を含む文を作る

- ・ 高年齢ほど「平等への志向」が強い。
- ・ 高年齢ほど「原子力発電への志向」が否定的。
- ・ 社会的地位が高いほど将来不安感が低い。

次に、平等志向、原発志向、社会的地位などを、どう測定するか考え、データを取る。調査が終わりデータが完成したら、仮説にもとづいて分析する。結果を、調査報告書、論文、本にまとめる。

問 自分の研究に関して、主な仮説と、対立仮説を書け。

2) 方法 データと変数の説明

生活と防災に関する意識調査

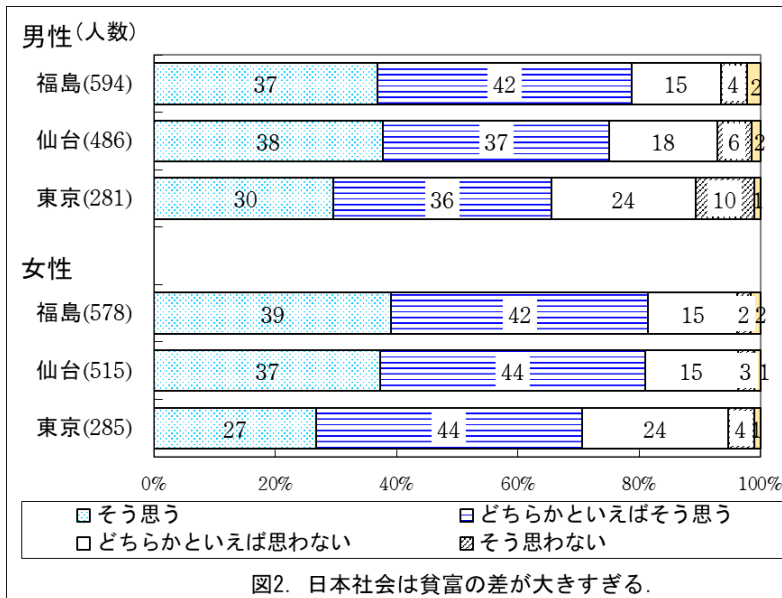
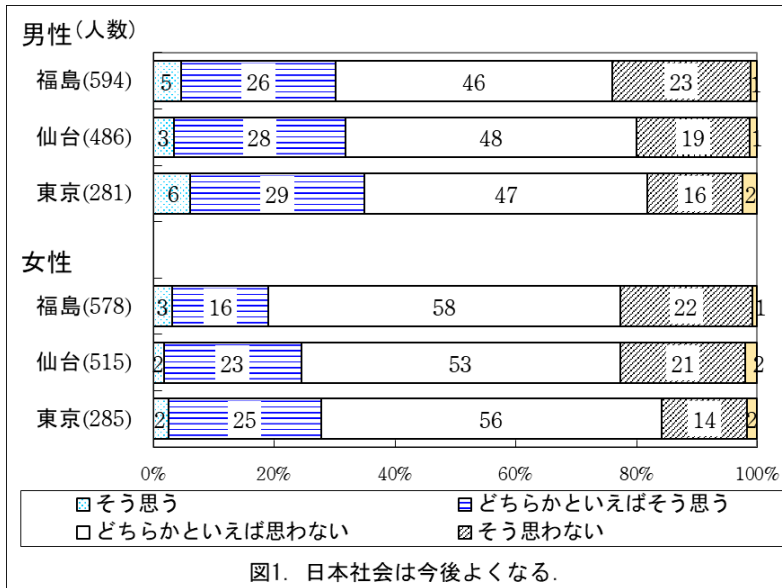
2015福島市調査 20歳以上の2100人対象、有効回収数1452人（回収率69%）、東京774人（52%）、仙台1210人（67%）

確率比例抽出法により福島市内では70地点を抽出。

各調査員は福島市内の70地点へ行き、スタート地点として指定された家から初めて、指定された30軒から回収。追加はしない。

3) 分析結果

震災後に転入した人は除いて分析した。



社会学における説明とは 原・浅川, 2009. 『社会調査 改訂版』

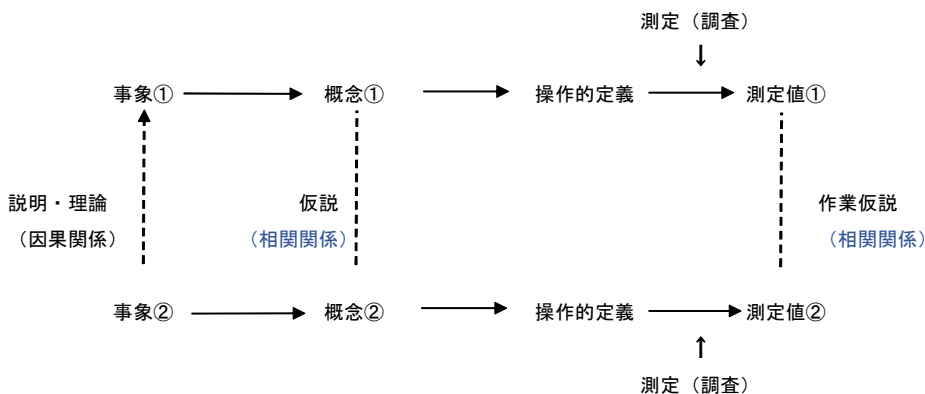


図3-1 記述と説明の基本構造

原・浅川(2009)より

操作仮説（作業仮説）は、因果関係を、測定できる変数のレベルにしたもの。
自分なりの因果関係を考える

例1 世代により原発への態度が異なる

必ず原因と結果の、2つの変数を含む文にする
→操作仮説にする（具体的な変数を用いた文にする）

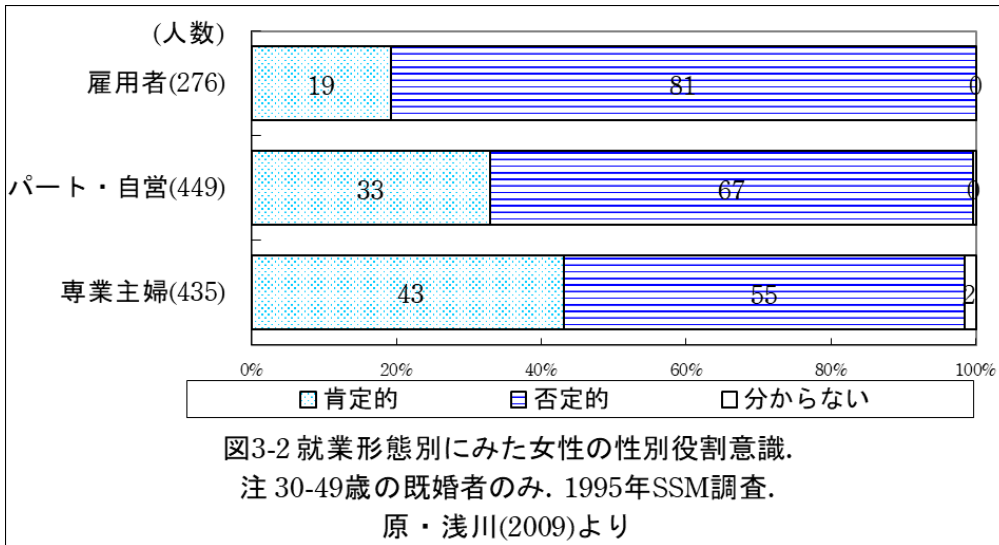
例2 自分の社会的立場により、価値観が変わる

実際に見えるのは作業仮説の相関 仕事の形態 → 価値観、性別役割意識

以下図3-2 実際に見える関連

質問項目「男は外で働き、女は家庭を守る」

女性で年齢を絞った上で、職業との関連を分析。職業とは何か。



この結果の解釈は。自己正当化か、日頃の生活の反映か、背後に他の変数があるのか。

★分析のこつ 性別、年齢、地域を絞らないと明確な関連が出ない。

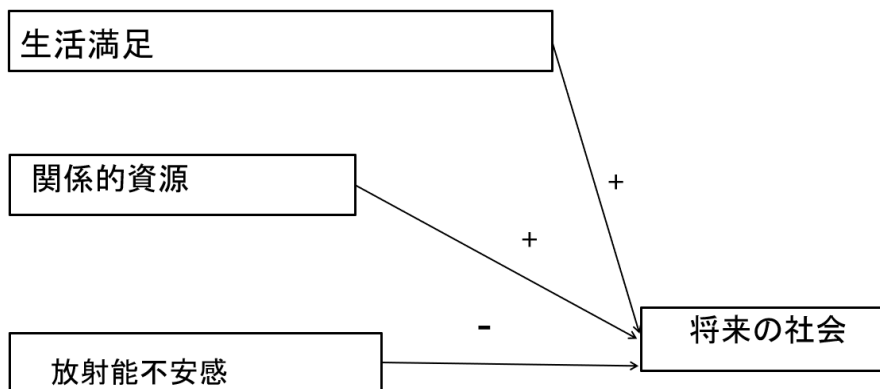
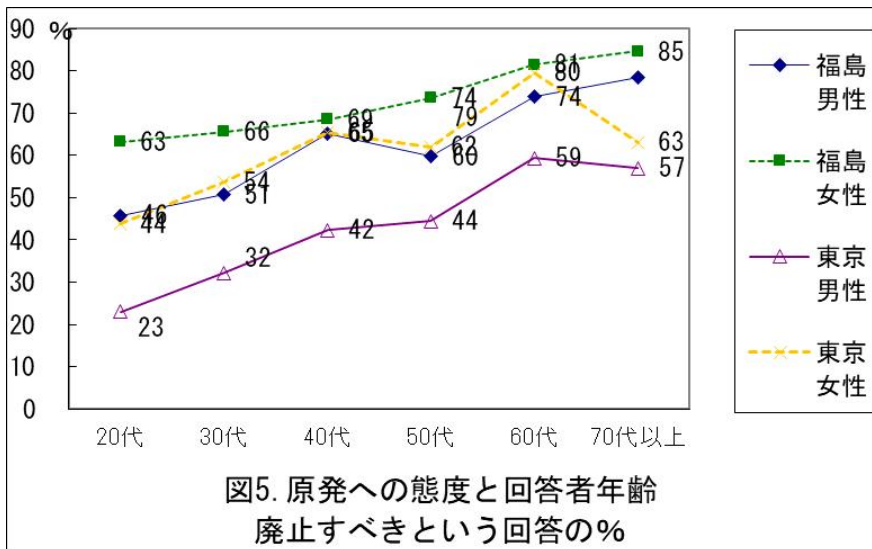


図4. 将来認識の規定因 重回帰分析結果 福島市男性



4) 結論

将来認識の規定因

生活満足感などの基本的な社会意識や、人間関係保有が重要。
地域、性別により規定メカニズムは異なる。

国際比較のポイント

- ・ 格差の種類 貧富、都市度、地域、人種
特定層への富の集中
- ・ 産業化の程度
- ・ 地域の組織 近所つきあい、上下関係、親戚
- ・ 言論の自由、民主主義の歴史

14. 論文構成のポイント 目的、方法、結果、結論

論文は4つの部分からなる。必ず冒頭部で、目的と仮説を明確に書く。

村瀬ゼミホームページの卒論構成注意をよく見る。

冒頭部で具体的な目的を提示する。

目的と結論が対応していることが重要。

分析結果と結論は異なる。結果は事実、結論は自分の主張。

事実をもとに、自分の主張が何かを明確に、かつ、結果と対応して書くこと。

その他の注意点

テキスト発表の際は、必ず、最後に各自の批判意見を書くこと。単なる感想でなく内容への批判を書く。自分独自の考えを書いているものは高得点となる。資料は箇条書きで内容を要約すること。